

ヘレニズム時代東地中海のワイン交易

—エジプトからの視点—

周藤 芳幸

Wine Trade in the Eastern Mediterranean World in the Hellenistic Period: A View from Egypt

Yoshiyuki SUTO

ヘレニズム時代の東地中海において大規模なワイン交易が展開されていたことは、該期の遺跡から出土する膨大な数の地中海系アンフォラが明らかに示すところである。しかし、「ワイン交易」と総称される経済的な活動のメカニズムの詳細については、なお不明な点が少なくない。とりわけエジプトの場合には、近年パピルス史料の精査や考古学的な踏査を通じて、ナイル流域におけるワイン生産の規模が再評価される傾向にあり、かつてのように単なるワインの需要という観点からだけでは、東地中海各地からの活発なワインの輸入という現象を説明することが困難になりつつある。そこで、本論文では、エジプトにおけるこれまでの調査の成果を踏まえながら、ヘレニズム時代に東地中海を舞台とするワイン交易が活性化した要因を検討した。その結果、伝統的にエジプトと関わりの深いエーゲ海南東部において紀元前4世紀以降に複数の海港都市が競合的に発展したことと、エジプト内部において地中海系のワインに独自の文化的価値が賦与されていたことが、該期のワイン交易の発展に大きく寄与したであろうことを明らかにした。

キーワード：ヘレニズム、東地中海、エジプト、ワイン交易、アンフォラ

Vast number of diagnostic amphora handles excavated from various sites in the eastern Mediterranean eloquently testifies the remarkable intensity of the wine trade in the Hellenistic period. The mechanism that promoted this flourishing wine trade, however, has not yet been elucidated. It is now difficult to explain the diffusion of Mediterranean wine throughout Egypt merely through the relationship between supply and demand, since papyrological as well as archaeological evidence strongly indicates that sufficient wine was produced in Egypt under Ptolemaic rule. This paper suggests that the development of major centers of maritime commerce in the south-eastern Aegean, the traditional gateway between Egypt and Greece, and the establishment of a cultural value for the wine of Mediterranean origin contributed to the intensification of wine trade in the Hellenistic period.

Key-words: Hellenism, Eastern Mediterranean, Egypt, wine trade, amphora

はじめに

紀元前257年5月10日、この頃プトレマイオス2世のもとで宰相(*dioiketes*)を務めていたアポロニオス(Apolonios)がパレスティナで所有していた農園を視察したグラウキアス(Glaukias)は、アポロニオスに宛てて、以下のような書簡を送っている¹⁾。

「…バイタノタに到着した私は、メラスを伴って、ブドウやその他すべての作物の出来を検分に出かけました。彼の仕事ぶりは有能で、ブドウ畑には8万株が植えられてい

るとのことでした。そこには、貯水槽と立派な屋敷もあります。私はワインも試飲しましたが、どちらが地元産でどちらがキオス産か、区別がつかせませんでした…」(*P. Lond.* VII 1948)

この書簡の中で、当該の農園で栽培されたブドウから生産されたワインが高品質であることを保証するのに、エーゲ海東部のキオス(Chios)島のワインが引き合いに出されているのは、この時代のワイン交易について考える上で、きわめて興味深い。というのも、この書簡で行われて

いるような情報伝達は、キオス産のワインこそ質の高いワインの代表的存在であるというコードが共有されていなければ成り立たず、そのようなコードが定着する契機として、それ以前にキオス産ワインが東地中海に広く流通していたという事態が想定されるからである。実際、後述するように、キオス産のワインが紀元前7世紀からエジプトに輸入されていたことは、末期王朝時代のエジプト各地の遺跡からキオス産アンフォラの破片が出土する事実によって確認することができる。

近年、ギリシア経済史においては、M. フィンリー (Finley) の記念碑的な著作 (Finley 1973) を乗り越える試みが精力的に進められており、それは彼が独自性を認めようとしなかったヘレニズム経済の分野でとりわけ顕著である (伊藤 2010; 周藤 2014: 331-332)。そこで、もっとも激しい議論の対象となっているのが、交易の問題である (Cartledge 2002: 26-29)。それでは、交易とは何であろうか。

考古学の立場からは、交易 (trade) とは「モノの空間的な移動」に与えられる解釈の一つである。特定の価値を

有していたことの明らかなモノが、A地点で製作された後、何らかの理由によってB地点まで運ばれ、B地点から出土するという現象は、考古学的調査の様々な場面で観察される。このような現象を説明するための仮説としては、交易の他にも様々な交換 (贈与 gift-exchange を含む)、略奪などが想定可能であるが、個別のケースがそのどれに対応するのかは、文字史料が残っていない時代の場合、モノそのものの機能や、それを取りまく社会的なコンテキストから総合的に判断するしかない。さらに、モノとして残らない物資の交易については、そもそも考古学的に問題にすることが難しいのが一般的である²⁾。

幸いにも、ヘレニズム時代の東地中海の場合には、他文化の社会とは異なって文字史料が相対的に豊富に伝存するため、穀物やワインのようにモノとしては残らない物資の交易についても、一定の考察を加えることが可能である。しかも、ワインについては、主にワインの海上交易に用いられたと考えられる運搬用の土器であるアンフォラが遺物として幅広く出土するため、これを手がかりとする研究が



図1 東地中海と本文中で言及した主要な都市

蓄積されてきている。しかし、地中海の各地で生産されていたワインが、なぜヘレニズム時代にこれほど盛んに交易されていたのかという根本的な問題をめぐっては、依然として明確な説明が提示されていないように見える。というのも、文字史料と考古学的史料は、いずれもワインの空間的な移動が、単にワインの生産地から自給不可能な場所への移動に留まらなかったことを示しているからである。

そこで、ここでは主としてアンフォラから得られる情報に基づきながら、ヘレニズム時代の東地中海におけるワイン交易の活性化をもたらした要因が何であったのかを、エジプトの場合を事例として、具体的に論じていくことにする。

1. ヘレニズム時代のワイン交易に関係する史資料

ヘレニズム時代の東地中海でワインが広汎に交易されていたことを示す史資料は少なくないが、いくつかの例を通じて、議論の前提となるその特徴を明らかにしておきたい。

エジプトのナウクラティス出身のアテナイオス (Athenaeus) が紀元後2世紀末に著した『食卓の賢人たち』 (*Deipnosophistai*) 全15巻は、博覧強記の登場人物たちが、古今の文献に現れる食物や料理、並びにそれに関連する雑知識について蘊蓄を傾け合う様子を活写した奇書として知られている。その情報源 (典拠) の中で中心的な位置を占めているのは、その多くが現在は散逸してしまった歴史書やアッティカ中・新喜劇などの文学作品であるが、これらは時代的には古典期後半からヘレニズム時代の前半に成立したものであり、そこには何らかの形で同時代の社会状況が反映されているとみなして差し支えないであろう³⁾。この作品では、宴席が舞台となっているだけに、地中海各地のワインが頻繁に言及されている。とりわけその第一巻では、喜劇に言及される有名なワイン産地として、キオス、タソス (Thasos)、レムノス (Lemnos)、レスボス (Lesbos)、ペパレートス (Peparethos: 現在のスコペロス Skopelos)、レウカス (Leukas)、イカロス (Ikaros)、エウボイア (Euboea)、コス (Kos)、ロドス (Rhodos) などのエーゲ海の島々、メンデ (Mende)、ランプサコス (Lampsacos)、アカントス (Akanthos)、コリントス (Korinthos)、フリウス (Phleius)、ミュンドス (Myndos)、ハリカルナッソス (Halikarnassos)、クニドス (Knidos) などのエーゲ海に面した諸都市が挙げられているが、このような各地のワインの味の比較は、それらが相互に広く流通してはじめて意味をもったはずである。アテナイオスからはまた、キオス産のワインがしばしばタソス産のワインとともにギリシア産の高級ワインの双璧とみなされていたこと、少なくとも中・新喜劇の時代には、ヘレニズム時代の後半には市場を席卷することになる

ロドスやコスのワインに対する評価が必ずしも高いものではなかったことが窺われて、興味深い⁴⁾。

ワイン交易に関する出土文字史料は、必然的にエジプトにおける情報を伝えるものに限られざるをえないが、一例として紀元前259年初夏の日付をもつパピルス (P. Cair. Zen. 59012) は、エジプトの東の玄関口であるペルシオン (Pelusion) で輸入ワインに高率の税が課されていたことを伝えている点で重要である (Préaux 1939: 372-375)。このリストには、上述した宰相アポロニオスのためにシリアから二隻の船で輸入された物品の価格とそれに対する関税額が記されているが、それらは税率 (二分の一、三分の一、四分の一、五分の一) とそれらを積載していた船ごとに記録されている⁵⁾。そこからは、ワイン (「漉されたワイン」と「通常のワイン」、いずれも産地は明記されていない) には二分の一税が、またキオス産とタソス産のワインには三分の一税が課されていたことが分かる⁶⁾。このような課税システムの存在は、エジプト国内でギリシア産のワインが高値で取引される原因となっていたと考えられる。

次に考古学的史料に目を移すならば、アンフォラがワインの流通状況に関わる決定的に重要な資料であることに疑いはないであろう。アンフォラとは、本来は向かい合わせに二つの把手が付く土器の総称であるが、特に交易用アンフォラと言う場合には、ワインに代表される液体産物の水上輸送用に特化した大型の尖底土器を指す (以下、本稿で言及するアンフォラは、すべてこの交易用のアンフォラである)。エーゲ海と南イタリアを主産地とするアンフォラの把手には、紀元前5世紀の末から生産地や生産年 (月) を表示するスタンプが押されるようになったため、ヘレニズム時代になるとアンフォラの情報量は飛躍的に高まることになった⁷⁾。なかでも、二つの把手のそれぞれに紀年銘 (eponym) と工房銘 (fabricant) とが刻印されたロドス産のアンフォラについては、ヘレニズム時代の初期から末期までを7期に区分した上で絶対年代と対照させた編年の枠組が確立されている (Finkielsztejn 2001)。

このように、ヘレニズム時代のワイン交易を考察する上で第一級の史料とみなされてきたアンフォラであるが、その史料特性については、様々な批判的見解が提示されていることも事実である。それは、J. K. デイヴィス (Davies) が史料としてのアンフォラの可能性を「夢であると同時に悪夢である」と評していることに、端的に示されている (Davies 2001: 27-29)。ここで「夢」と呼ばれているのは、言うまでもなく、アンフォラについては、器面に押されたスタンプの刻印から、一般的な土器では考えられない直接的な情報 (生産された場所、工房の名称、製作された年代) を得ることができるという事実である。そこからは、そのアンフォラに詰めて輸送されたワインの産地と年

代を知ることができるばかりか、生産量や交易ルートを復元することも可能になる。さらに、ロドス産のアンフォラについては、紀年銘スタンプの編年がかなり詳細に明らかにされているため、そのようなスタンプを伴うアンフォラの把手は、環地中海世界において遺跡の年代を決定するためのもっとも信頼できる手がかりとなっているのである。一方で、「悪夢」と呼ばれているのは、アンフォラの報告書が様々な言語で公刊されているために情報の博搜が容易ではないという現実的理由に加えて、スタンプを伴う例と伴わない例との比率が明らかでないこと、内容物が必ずしもワインには限られなかったであろうこと、どれくらいのアンフォラが再利用されていたのかが不明であること、などの諸事情である。

しかし、近年 J. ルンド (Lund) がロドス産のアンフォラについて再確認しているように、アンフォラによって輸送されていたもっとも主要な物資がワインであったことは、ほぼ確実とみなしてよいであろう (Lund 2011: 282)。そこで、次節ではエジプトの諸遺跡におけるヘレニズム時代の地中海系のアンフォラの出土状況を検討していく。

2. エジプト出土の地中海系アンフォラ

ヘレニズム時代のアンフォラは、地中海と黒海周辺のあらゆる遺跡から出土するといっても過言ではないが、組織的な発掘調査によって得られたデータがモノグラフとして公刊されているケースは意外に少ない⁸⁾。エジプトの場合も事情は同様であり、コンテキストが明確なまとまった量の出土例について検討することが可能な遺跡は、日本隊が調査している中エジプトのアコリス (Akoris) (351点)、フランス隊が調査するデルタのタニス (Tanis) (112点)、ポーランド隊が調査するアトリビス (Atribis) (271点) にほぼ限られる (Kawanishi and Suto 2005; Chaby 2009; Sztetytto 2000)。

なお、エジプトの場合に限らず、アンフォラを生産地を考察する際の問題点について、あらかじめ指摘しておく必要があるだろう。まず、考察の対象となるのがあくまで報告された事例であって、そのコーパスの単位もまちまちであることは、常に銘記されなくてはならない。たとえば、アコリスから報告された351点のアンフォラ把手が、1997年から2001年にかけて調査されたアコリス都市域北端部の単一の発掘区から出土したものであるのに対し、アトリビスから報告されている271点は、1986年から1995年にかけて順次発掘区を拡大する形で行われた調査で出土したもので、それらが由来する発掘区の面積はアコリスのそれよりもはるかに広い。これに対して、タニスからの112点は、複数の機会に報告された事例の合算であって、出土コ

ンテキストは不明である。同一の遺跡であっても、発掘区が異なればコーパスの内容も変わってくることは十分に予想されるので、この点には留意が必要である。また、当該のコーパスに数十点の紀年銘スタンプが含まれていれば、それは数十年の年代幅があることを意味している (アコリスの場合には約一世紀、タニスの場合には約二世紀半)。従って、その間のどこかの時点で輸入元が大きく変わったとしても、それが通時的な動態としてコーパスに反映されることはない。これらのコーパスはあくまで共時的なものであり、その点にも常に留意が必要である。しかし、それでもなお、これらのコーパスからは、アンフォラを生産地について、一定の見通しを示すことが可能である。

図2は、これら3つの遺跡から報告されているスタンプの付されたアンフォラ把手について、生産地別の割合を示したものである。いずれの遺跡においても、もっとも多くを占めているのはロドス産のアンフォラであり、アコリスでは8割近く、タニスでも6割以上を占め、アトリビスでも5割に迫っている。これは、時期によって多少の差はあっても、エジプトに特徴的に見られるパターンであり、出土例が10万点にも及ぶことが推測されているアレクサンドリア (Alexandria) では、母体となるデータにもよるが、85%をロドス産が占めていたという指摘がある (Grace 1953: 117)。やや古いデータになるが、J. -Y. アンブルール (Empereur) によって報告されたファイユームのアルシノエ (Arsinoe: クロコディロポリス Crocodilopolis) では、95点のうち91点までがロドス産、残りはイタリア産とコス産が2点ずつとなっており、ロドス産の占める割合はさらに高い (Empereur 1977: 198)。

ロドス産について多いのが、いずれの遺跡においてもしばしばグレコ=イタリックと呼ばれるイタリア (主にバリー (Bari) やブリンディッジ (Brindisi) などのアプーリア地方) 産のアンフォラであることは、きわめて興味深い⁹⁾。アコリスの場合、ロドス産の275点に較べて19点と出土量は多くないものの、エジプトの遺跡から共通して相対的に高い割合でイタリア産のアンフォラが出土する事実は、別途、検討に値するであろう。周知のように、東地中海では紀元前3世紀末からローマが国際政治の上で重要な役割を果たすようになり、同時代の歴史家ポリュビオス (Polybius) が指摘したように (Polyb. 1.3.3-6)、地中海をとりまく各地の動向が複雑に結びついた (*symploke*) 結果、やがて第三次マケドニア戦争によってアンティゴノス朝マケドニア王国は滅亡し、ローマは東地中海の覇者となった。エジプトの諸遺跡から出土するイタリア産のアンフォラは、この時期におけるおそらくロドスを介したイタリアとエジプトとの交易関係を跡づけるための重要な資料とみなすことができる。

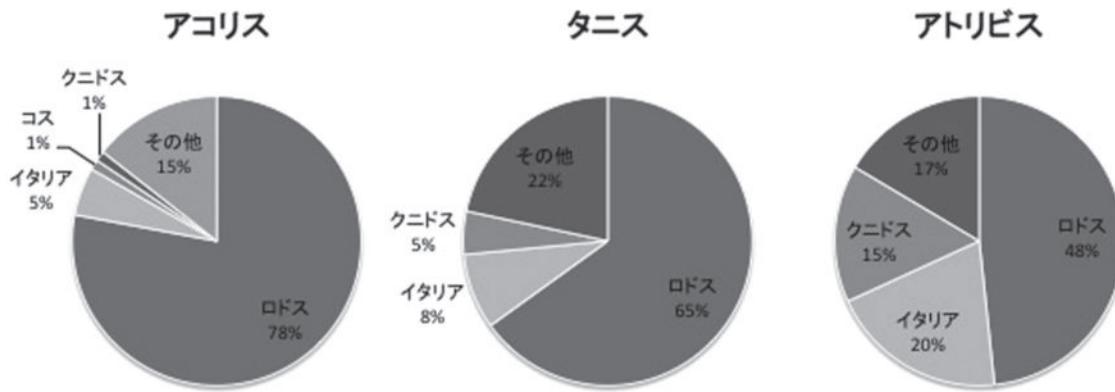


図2 エジプト領域部の3遺跡における出土アンフォラ把手の産地の割合
(Kawanishi and Suto 2005; Chaby 2009; Sztetytto 2000 のデータをもとに筆者作成)
総点数はアコリスが351点、タニスが112点、アトリビスが271点

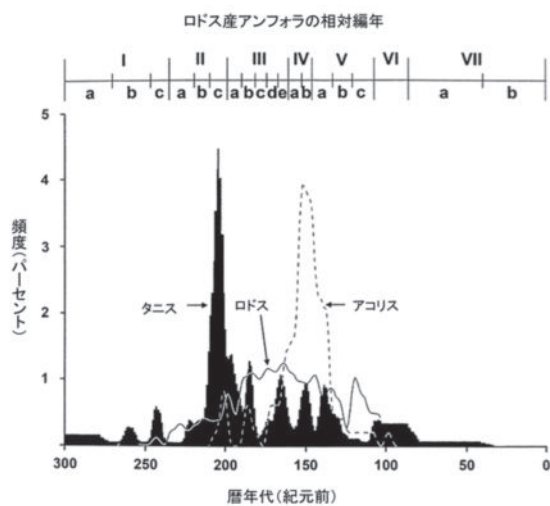


図3 タニス、ロドス、アコリスから出土したロドス産アンフォラの年代分布 (Chaby 2009: Fig. 2 による)
縦軸はタニス (73点)、ロドス (2558点)、アコリス (97点) についての時期ごとの頻度 (パーセント)、横軸上はフィネルシュテインによるロドス産アンフォラの相対編年、横軸下は暦年代を示す

イタリア産に続いて多いのが、コス産とクニドス産のアンフォラである。クニドス産のアンフォラのシェアは、エーゲ海方面ではロドス産のそれを凌駕しており、デロス (Delos) で60%、アテネ (Athens) では70%に達していることが知られている (Grace and Savvatiadou-Pétropoulakou 1970: 281 (デロス); Jöhrens 1999: 157 (アテネ))。対照的に、エジプトでは、これらの産地のアンフォラは、コンスタントに出土はするものの、その量は多くない。

次にロドス産アンフォラの紀年銘を手がかりとして年代分布について見ると、アコリスの場合にはIIc期のミュティオン (Mytion) (1点) とエウクラティダス (Eukrati-das) (3点) のものがもっとも古く、これはフィネル

シュテインの絶対年代観に従うならば、紀元前209年頃から紀元前199年頃までに相当する。その後、IIIa期からIIIc期 (紀元前198年頃から紀元前188年頃) の例は依然として少ないが、その最終段階にあたるIII d期から出土例は急激に増加し、IVa期からIVb期 (紀元前160年頃から紀元前146年頃) にかけてピークに達した後、再び減少して、VI期 (紀元前107年頃から紀元前86年頃) を最後に、ロドス産のアンフォラはその姿を消していく (周藤 2014: 339-342)。この間の増減パターンはほぼ正規分布に従っており、この遺跡へのアンフォラの搬入が短期的な事件によるものではなく、ある程度安定したシステムによっていたことを示唆している。

一方で、タニスからの出土パターンに目を向けると、ここでは年代分布がより長い期間にわたってはいるものの、図3が示すようにピークは明らかにアコリスよりも早い時期 (IIc) にある。アレクサンドリアからのデータによれば、母集団の設定の仕方によって多少は異なるものの、概ね紀元前2世紀を通じて (すなわち第三次マケドニア戦争の事後処理に伴うロドスの自治喪失という政治的に重要な事件の介在にもかかわらず)、ロドスからアレクサンドリアに搬入されたアンフォラの量は一定の水準を維持していたと考えられるので (Lund 1999)、アコリスやタニスで観察される顕著な増減については、エジプト国内における中心市と領域部との相互関係の中で解釈されるべきであろう。

3. ワイン交易の基本構造

地中海系のアンフォラの出土という現象によって跡づけられる東地中海のワイン交易は、いったい何によって促進されたのであろうか。エジプトの場合、前節で確認したように、出土アンフォラの中で圧倒的に高い割合を占めているのはロドス産のアンフォラであるため、ここではまず同

時代のロドスの状況から考察を始めたい¹⁰⁾。

古典期の末からヘレニズム時代にかけてのロドスの繁栄が、エジプト産の小麦の地中海各地への供給に基礎を置いていたことは、周知の通りである¹¹⁾。たとえば、紀元前300年頃にエフェソス (Ephesos) で決議された顕彰碑文によれば、アガトクレス (Agathokles) というロドスの商人は、100トン近い穀物をエフェソスで売り捌こうとした際、同地の市場監督官の要請に応じて市場価格よりも安価で穀物を供給した功績によって、その子孫までエフェソスの完全市民権を享受する特権を付与されている¹²⁾。「ロドスの歳入はエジプトへ航海する商人たちに多くを負っており、ロドスはこの王国によって養われているようなものだった」というシチリアのディオドロス (Diodorus Siculus) の有名な言葉 (Diod. 20.81) を参照するならば、エジプトから出土するロドス産のアンフォラが、エジプトからの小麦を地中海の各地に運んだロドスの商船によって、帰り荷としてもたらされたものであったことは明らかである。その際、小麦とワインのどちらが主な交易品であったかを問うことに、あまり意味はないであろう。確かに、ヘレニズム時代にしばしば東地中海の諸都市を襲った穀物不足は、エジプト産やキュレネ産の小麦の需要を高めたに違いない。しかし、エジプトとロドスとを結ぶ交易船が空荷では安定して外洋を航行できない以上、バラストとなるような相応の重量があり、かつエジプトで需要のある物資をアレクサンドリアまで搬送することは必要不可欠だった。このように、ヘレニズム時代の海上交易において、ワインを詰めたアンフォラという考古学的に可視性の高いモノは、エジプト産の小麦という考古学的に可視性のきわめて低いモノのプロクシーとみなすことができるのである。

この点で、古典期以前とヘレニズム時代とでは、エーゲ海におけるワイン交易のセンターに明らかな変化が見られることも注目に値する。アテナイオスなどの古典史料からも明らかなように、前古典期から古典期にかけての高級ワインの産地として盛名を誇っていたのは、キオスとタソス、それにレスボス (Clinkenbeard 1982) やメンデ (Papadopoulou and Paspalas 1999) などのエーゲ海北半の諸都市だった。これらの都市のワインは、ギリシア世界の各地で愛飲されただけでなく、紀元前7世紀のサイス朝の成立、とりわけ交易拠点ナウクラティス (Naukratis) の整備によって交易関係が強化されたエジプトにも浸透した。サッフォの兄弟カラクソス (Karaxos) がレスボスからナウクラティスにワインを輸出していたという逸話も、往事のレスボス産ワインの販路の広さを伝えている¹³⁾。

ところが、これらの都市から遠隔地へのワインの輸出は、キオスを例外として紀元前4世紀の末までに急速に衰微したらしく、これ以降は少なくともこれらの地域ではア

ンフォラが生産されなくなる (Whitbread 1995: 6, Table 1.1)。代わって急速に台頭したのが、エーゲ海南東部のコス、クニドス、そしてロドスであり、ヘレニズム時代に入ると、エジプトにおいて見てきたように、これらの都市から輸出されたワインが市場を席卷するようになるのである。それでは、なぜ、これらの都市はワイン交易の新たなセンターとしての地位を獲得したのであろうか。おそらく、その主たる要因は、これらの都市が紀元前4世紀に相次いで海港都市としてのインフラ整備に成功したことにある¹⁴⁾。

ロドスは、早くもホメロスの叙事詩において、イアリュソス (Ialyssos)、カメイロス (Kameiros)、リンドス (Lindos) の3都市から成ると謳われているが、これらの相互に独立した都市はペロポネソス戦争の過程でデロス同盟から離反したのを機として、紀元前408年にロドス島の北端に新たな計画都市ロドスを建設して、ここに集住を行った。ヒッポダモス様式で計画されたこの都市には、東側に2つの港と西側に1つの港が設けられ、成立当初から海上交易に重心を置いていたことが明白である。ヘレニズム時代になると、城壁で囲まれた都市域が拡大された結果、東側にはさらに2つの港が増設され、海港都市の機能が強化された (Philimonos-Tsopotou 2004)。

コスの場合も、古典期には島内に複数の拠点的な集落が存在したが、これらは紀元前366/5年に集住を達成し、島の北東部のハリカルナッソスと向かい合う位置に、新たな計画都市コスを建設した (Sherwin-White 1978)。紀元前4世紀後半のコスの動向については不明な点が多いが、紀元前308年にはアナトリアの地中海沿岸を東から進軍してきたプトレマイオス (1世) がコスをエーゲ海への橋頭堡とし、同地で後のプトレマイオス2世が誕生している事実は、この都市が半世紀ほどの間に海港都市として順調な発展を遂げていたことを示唆している。

クニドスの場合はさらに不明な点が多いが、ダッチャ (Datça) 半島の中程にあった中心市 (古クニドス) に代わって、紀元前4世紀のどこかの時点で、半島の先端部に新たな都市 (新クニドス) が築かれたことが知られている。興味深いのは、小島と本土とを突堤で結び、南北に港を配するその都市プランが、アレクサンドリアのそれを彷彿とさせることである。

このように、ヘレニズム時代のエジプトから数多く出土するギリシア系のアンフォラの産地が、いずれもこれらの新興の海港都市であることは、おそらく偶然ではないであろう。しかし、いかに海港都市のインフラが整ったとしても、やはりエジプトの側にワインに対する需要がなければ、穀物交易とワイン交易とのバランスは成り立たないはずである。それでは、ヘレニズム時代のエジプトにおける

ワインの流通状況は、どのようなものだったのであろうか。

4. エジプトにおける地中海系ワインの需要

ヘレニズム時代にはエジプトでもワインが盛大に生産されていたことは、アテナイオスがマレオティス湖周辺のワインについて述べているところからも窺われる通りである (Ath. 33d-f)。問題は、それでエジプトにおけるワインの需要を満たすことができたのか否かであるが、この点について、K. ヴァンドルプ (Vandorpe) と W. クラリュス (Clarysse) は、ファイユーム (Faiyum) から出土したパピルス史料 (*P. Köln V 221*) に基づき、以下のような興味深い試算を提示している (Vandorpe and Clarysse 1997)。

紀元前 190 年頃のアルシノイテス州における 6 ヶ月分のブドウの収穫量とそれに対して課されたアポモイラを記したこの史料によると、そこでは 11 万 1 千ヘクトリットル (一年に換算すると 22 万 2 千ヘクトリットル) のワインが生産されたと推測される¹⁵⁾。この時代の人々が年に 100 リットルのワインを消費していたとすると、22 万 2 千ヘクトリットルを在地社会だけで消費するには、22 万 2 千人の人口が必要である。ところが、人頭税である塩税^{ハリケ}の記録から、アルシノエ州の人口は 10 万人程度であったことが分かっている。ということは、アルシノエ州で生産されたワインは、その半分以上が他の土地に搬出されていたことになる。

もちろん、このような机上の試算はさまざまな仮説の上に行われているので、必ずしも額面通り受け取るわけにはいかないが、近年マレオティス湖の周辺で数多く確認されているアンフォラの工房やワインの醸造施設の遺構は、この時代にはエジプトでも相当量のワインが生産されていたことを裏付けている。換言すれば、文字史料と考古学的史料は、ともにこの時代のエジプトでは、エジプト産のワインが量的には十分に市場に供給されていたことを示唆しているのである。それでは、これと並行して膨大な地中海系ワインがアンフォラによって輸入されていた事実は、この状況とどのように整合させれば良いのであろうか。

この点を考える際に参考になるのが、領域部の社会におけるワインの文化的な機能である。別の場所でも言及したように (周藤 2014: 188-190)、紀元前 2 世紀末にアルシノイテス (Arsinoites) 州のケルケオシリス (Kerkeosiris) 村で「村の書記」を務めていたメンケスの文書に含まれる会計記録によれば、ワインが購入されているのは高位の役人がケルケオシリス村に滞在している日であり、そこからこの史料を分析したフェアホークト (Verhoogt) は、このような村では一般にワインがギリシア的な社会環境に属する役人のために購入されていた可能性を指摘している

(Verhoogt 2005)。ここで役人の接待に用いられたワインが地元産であったのかギリシアからの輸入品であったのかは知る由もないが、アテナイオスなどに繰り返されるギリシア産ワインの評価や、上述した宰相アポロニオスへの輸入品のリストなどを参照するならば、単なるワイン一般の需要とは別な次元で、ギリシアからの輸入ワインに対する需要が存在したことは十分に想定される。それは、アレクサンドリアのように、ギリシア世界の各地から移住者が集うことによって形成された都市においては、なおさらであったと考えられよう。

5. おわりに

ヘレニズム時代は、世界史における最古のグローバル化の時代だった (周藤 2014)。そこでは、それまでポリス相互の間を、あるいはポリス世界と非ポリス世界との間を隔てていた壁が急激にその実質を失い、きわめてモビリティの高い世界が現出していたのである。とりわけエジプトの場合には、アレクサンドロス大王によって地中海のほとりに礎を据えられたアレクサンドリアという海港都市が、初期プトレマイオス朝の王たちによる安定した統治のもとでヘレニズム文明の強力な磁場へと発展した結果、そのようなモビリティはひととき高かったことが知られている。「プトレマイオス朝エジプト」と呼び慣わされてはいるものの、アレクサンドリアの宮廷を構成していたのは、ギリシア世界の各地からこの磁場に引き寄せられたギリシア人たちであり、また常にアンティゴノス朝マケドニアに脅かされていたギリシアの諸ポリスからは、この富裕な王国の富と権威を後ろ盾に生き残りを図るべく、外交使節が頻繁にエジプトに送られていたことも、ポリュビオスなどの古典史料などからよく知られている通りである。このような外交使節に対して、プトレマイオス朝はしばしば穀物の贈与をもって援助に代えたが、そのような国際関係のあり方も、東地中海の交易の活性化を促したに違いない。

食糧事情と穀物交易の研究は、ヘレニズム時代の経済史の見直しが進む中で近年とみに活況を呈している分野であるが (Oliver 2007 など)、モノとして残らない穀物交易の実態を逆方向から照射する貴重な手がかりとして、東地中海を舞台とするアンフォラの流通とワイン交易の考古学的な解明は、今後ますます重要性を増すと考えられるのである。

註

- 1) いわゆるゼノン文書の一つであるこのパピルスの詳細については、Kloppenborg 2006: Appendix I, No. 3 を参照。なお、書簡中のバイタノタ (あるいはバイタナタ) (Baitanota) は、ベト・アナト (Beth-Anath) で、ガリラヤのプトレマイス近郊に位置していた (Pestman 1981: 481)。

- 2) このような交易品の代表的な例に、アフリカ北岸のギリシア植民市キュレネ (Cyrene) の特産品であった薬草 (香辛料) シルフィオンがある。
 - 3) アテナイオスについては、柳沼重剛訳『食卓の賢人たち 1』京都大学学術出版会の解説を参照。
 - 4) Ath. 28d-33c. コス産のワインに海水が混ぜられていたことは、プリニウスにも言及がある。Plin. *N. H.* 16.1.78-79.
 - 5) このパピルス裏面には、これらの各地の特産品がシリアからペルシオンに輸入されたと記されている。これは、エーゲ海からの交易船が、この時代の通常の見積ルートである時計回りで沿岸航路を航行していたことを物語るものであろう。
 - 6) 「漉されたワイン」については、アテナイオスにエピリュコス (Ephylos) の喜劇の一節として「キオスとタソスの酒を漉して」とあるのが参考になる。Ath. 28d.
 - 7) ヘレニズム時代のアンフォラ、とりわけロドス産アンフォラとその編年システムについては、周藤 2014: 第 16 章を参照。
 - 8) 主要なアンフォラの報告については、Lund 2011: 284, n. 33 を参照。
 - 9) イタリア産のアンフォラのスタンプについては、Desy 1989 を参照。
 - 10) ロドスの歴史の概要については、周藤・村田 2000: 第 11 章「ロドスとヘレニズム時代の東地中海」を参照。
 - 11) [Dem.] 56.10-17.
 - 12) *Syll.*³ 354. Gabrielsen 1997: 78-79.
 - 13) Strab. 17.1.33 = Ath. 13.68.
 - 14) 紀元前 4 世紀における東地中海の都市化の動きについては、周藤 2014: 64-67 を参照。
 - 15) アポモイラとは、プトレマイオス 2 世の時代に、プトレマイオス 2 世の姉であり妻でもあったアルシノエ 2 世の神格化に伴って導入された果樹園からの六分の一税で、これらはアルシノエ女神の祭儀のために充てられることが規定されていた。
- 参考文献
- Cartledge, P. 2002 The Economy (Economies) of Ancient Greece. In W. Scheidel and Sitta von Reden (eds.), *The Ancient Economy*, 11-32. Edinburgh, Edinburgh University Press.
- Chaby, R. 2009 *Les timbres amphoriques trouvés à Tanis de 1976 à 2008*. Paris, Books on Demand.
- Clinkenbeard, B. G. 1982 Lesbian Wine and Storage Amphoras: A Progress Report on Identification. *Hesperia* 51: 248-268.
- Davies, J. K. 2001 Hellenistic Economies in the Post-Finley Era. In Z. H. Archibald et al. (eds.), *Hellenistic Economies*, 11-62. London and New York, Routledge.
- Desy, Ph. 1989 *Les timbres amphoriques de l'Apulie républicaine: Documents pour une histoire économique et sociale*. BAR International Series 554, Oxford.
- Empereur, J. -Y. 1797 Timbres amphoriques de Crocodilopolis-Arsinoe. *BI-FAO* 77: 197-233.
- Finkielsztejn, G. 2001 *Chronologie détaillée et révisée des éponymes amphoriques rhodiens, de 270 à 108 av. J.-C. environ*. BAR International Series 990. Oxford, Archaeopress.
- Finley, M. 1973 *The Ancient Economy*. Berkeley, Los Angeles and London, University of California Press.
- Gabrielsen, V. 1997 *The Naval Aristocracy of Hellenistic Rhodes*. Aarhus, Aarhus University Press.
- Grace, V. R. 1953 The Eponyms Named on Rhodian Amphora Stamps. *Hesperia* 22: 116-128.
- Grace, V. R. and M. Savvatiadou-Pétropoulakou 1970 Les timbres amphoriques grecs. In *Exploration archéologique de Délos XXVII*: 277-382.
- Jöhrens, G. 1999 Kerameikos: Geschichte Amphorenstempel spätklassischer und Hellenistischer Zeit. *Athenische Mitteilungen* 114: 157-177.
- Kawanishi, H. and Y. Suto 2005 *Akoris I: Amphora Stamps*. Kyoto, Nakaniishi.
- Kloppenborg, J. S. 2006 *The Tenants in the Vineyard: Ideology, Economics, and Agrarian Conflict in Jewish Palestine*. Tübingen, Mohr Siebeck.
- Lawall, M. L. 1998 Ceramics and Positivism Revisited: Greek Transport Amphoras and History. In H. Parkins and Ch. Smith (eds.), *Trade Traditions and the Ancient City*, 75-101. London and New York, Routledge.
- Lund, J. 1999 Rhodian Amphorae in Rhodes and Alexandria as Evidence of Trade. In V. Gabrielsen et al. (eds.), *Hellenistic Rhodes: Politics, Culture, and Society*, 187-204. Studies in Hellenistic Civilization 9. Aarhus, Aarhus University Press.
- Lund, J. 2011 Rhodian Transport Amphorae as a Source for Economic Ebbs and Flows in the Eastern Mediterranean in the Second Century BC. In Z. H. Archibald, J. K. Davies and V. Gabrielsen (eds.), *The Economies of Hellenistic Societies, Third to First Centuries BC*, 280-295. Oxford, Oxford University Press.
- Oliver, G. J. 2007 *War, Food, and Politics in Early Hellenistic Athens*. Oxford, Oxford University Press.
- Papadopoulou, J. K. and S. A. Paspalas 1999 Mendeian as Chalkidian Wine. *Hesperia* 68: 161-188.
- Pestman, P. W. (ed.) 1981 *A Guide to the Zenon Archive (P. L. Bat. 21)*. Leiden, E. J. Brill.
- Philimonos-Tsopotou, M. 2004 *I Ellinistiki Ochyrosi tis Rodou*. Athina, Ypourgio Politismou.
- Préaux, C. 1939 *L'Économie royale des Lagides*. Brussels, Fondation Égyptologique Reine Élisabeth.
- Sherwin-White, S. M. 1978 *Ancient Cos: An Historical Study from the Dorian Settlement to the Imperial Period*, Hypomnemata 51, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht.
- Sztetytto, Z. 2000 *Pottery Stamps: Tell Atrib 1985-1995*. Warsaw, Wydawnictwo Neriton.
- Vandorpe, K. and W. Clarysse 1997 Viticulture and Wine Consumption in the Arsinoe Nome (P. Köln V 221). *Ancient Society* 28: 67-73.
- Verhoogt, A. 2005 *Regaling Officials in Ptolemaic Egypt: A Dramatic Reading of Official Accounts from the Menches Paper*. Leiden.
- Whitbread, I. K. 1995 *Greek Transport Amphorae: A Petrological and Archaeological Study*. Exeter, Fitch Laboratory Occasional Paper.
- 伊藤貞夫 2010 「史料研究と学説史 —古代経済史の場合—」『日本學士院紀要』64 卷 2 号 109-140 頁。
- 周藤芳幸 2014 『ナイル世界のヘレニズム』名古屋大学出版会。
- 周藤芳幸・村田奈々子 2000 『ギリシアを知る事典』東京堂出版。

周藤 芳幸
名古屋大学大学院文学研究科
Yoshiyuki SUTO
Graduate School of Letters,
Nagoya University